

僧玄奘は西遊記のモデル 中国

45年ぶりに懐かしい西遊記の再放送が始まった。子供の頃夢中になって読み耽った西遊記は面白く、子供の夢を際限なく膨らませてくれたものである。1978年テレビ放映され、堺正章の孫悟空・三蔵法師の夏目雅子さらに岸部シローや西田敏行らの好演技と人気絶頂のゴダイゴの音楽もあって、子供たちと一緒に欠かさず視聴した。

西遊記は唐の時代、中国から中央アジアを通り陸路インドへ向かった玄奘三蔵法師の足跡を記した「慈恩寺三蔵法師伝」を基にして、明時代の呉承恩が妖怪変化の空想物語を書いたのが西遊記といわれている。西遊記と言えば僧玄奘を思い浮かべるが、およそ1400年も昔に、命の危険も顧みずインドへ向かった動機は何であったのか、その足跡を辿ってみた。



西安 玄奘法師の拓本

6世紀中頃北インドに起こったヴァルダナ朝の名君ハルシャ・ヴァルダナは、インドを統一し、仏教を信奉し唐やペルシャとも交流を持った王である。遠く中国からやってきた玄奘が訪れたのはこの王のもとであり、王は僧に手厚い保護を与え、王も玄奘に学んだといわれている。

玄奘（602年～664年）は中国唐代の僧で、尊称は三蔵、法師である。629年、27歳の時に中国を旅立ち、遠く離れたインドを目指し帰国したのは16年後の645年であった。

玄奘は隋末期、現河南省洛陽で誕生した。幼少の頃より神童の誉れ高く13歳で仏門に入る。時代は隋から唐にかわった。仏典の研究は原典によるべきと考えインドの仏跡を巡りたいと唐朝に願い出るも、政権が変わったばかりで許可が下りず、やむなく密出国する。そして天山南路から北路を辿り中央アジア、ヒンズークシュ山脈を越えてインドへ至ったのである。

河西回廊を通り高昌へ行くが高昌王は熱心な仏教徒であったため、玄奘を高昌国に留めおこうとするもインドへ行って仏典の研究をしたいとする、ゆるぎない決意を知り物心両面をもって支援し送り出した。辿ったコースは高昌国・クチャなどタクラ

マカン砂漠を越え、パミール高原に至り、現ウズベキスタンのサマルカンドを経て、2001年タリバンによって爆破されて今はない貴重な仏教遺跡として知られるアフガニスタンのバーミヤンを通りインドへ至っている。玄奘が訪れた時代バーミヤンには巨大な金色に輝く仏像彫刻があったそうだ。

インドではナーランダ僧院のシーラバドラに師事した。その後各地の仏跡を訪れ、当初の目的を達し645年に、インドを後にして収集した657部の膨大なサンスクリット語の経典を陸路都長安に持ち帰ったのである。

唐の皇帝太宗はこうした玄奘の多いなる努力を多として密出国した罪は問わなかったが、太宗は西

域で見聞した諸々を報告するよう求め、まとめた報告書が「大唐西域記」である。仏教は唐の皇室や貴族の帰依、保護を受けて非常に栄えた。またインドと中国間の僧の往来もあった。玄奘は仏教の発展に多大な貢献をなし、忘れてはならない人物である。

持ち帰った膨大な数の経典の翻訳は、皇帝の勅命で最初は翻経院で次いで大慈恩寺において行われた。玄奘は余生の全てをつぎ込みサンスクリット語から中国語への翻訳作業に没入したが残念ながら持ち帰った経典の三分の一しか翻訳できなかった。

数ある経典のなかで最も重要とされる“大般若経”の翻訳を終えて、ほっとする間もなく脱稿した百日後の664年にこの世を去った。

中国の文化面で最も華やかに花開いた時代は唐の時代である。唐と言えば楊貴妃とのロマンスで名高い玄宗皇帝のいた時代で、日本からも遣唐使を送った時代である。唐の都は長安（現西安）である。西安市内の大慈恩寺の境内には、7層64mの大雁塔が今も天高く聳えている。大雁塔は唐の



西安・唐時代の大雁塔



大雁塔の最上階

時代玄奘三蔵がインドから持ち帰った貴重な仏典や仏像を保管するために建てられた建物である。最上階まで急な階段を息切れしながら登り、簡単な柵越しに眼下を見下ろすとあまりの高見に一瞬足がすくむ。

余談であるが玄奘の命がけの異郷への旅と重ね合わせるかのように、思い浮かんだことがある。

流暢な中国語を話す磊落な上司がいた。戦時中東亜同文書院を卒業し中国

奥地の調査を命じられ苦労したそうだ。日本人と中国人の風習や生活習慣の違いなど微細にわたる徹底した教育を施され、物騒な奥地の調査に送り出された。一步間違えると命の危険もあり、あの緊張感は平和ボケした今の日本では味わえないと折に触れ慨嘆していた。また日本の僧侶河口慧海も玄奘と同じくサンスクリット語で書かれた経文を求めて厳重な鎖国下にあったチベットへ命がけで潜入したことなど諸々を連想した。